

WATERにまつわる夢の象徴

— Ulyssesに関する一考察 (その2) —

吉 津 成 久

① 「英文学研究」第一号（梅光女学院短期大学英語英文学会発行）で発表した拙論「Ulysses に関する一考察——魂の父・子を求めて——」について、本稿をその2とする。本稿は特に主人公が経験する水にまつわる白日夢、幻想あるいは内的独白の中に潜在する人間の根元的な自由又は選択からわれらの純粋なる意識に現象する意義深い象徴についての考察を進めようとするものであり、併せてさきの論文において究明した父と子、母と子に関する<Ulysses>の主要テーマを別の角度から考察しようとするものである。

② 人間病理学=Phylopathologyの開祖である Trigrant Burrow という人（この人はもと精神分析学者であった）の書いた書物の中に次のような言葉がある。

When we say that a glove retains the impression of the hand from which it has been removed, we are not ascribing to the glove the faculty of memory. Similarly, we may observe in the child, during the early months of life, traces of a tendency which doubtless leads back to the prenatal experience. (Trigrant Burrow: Preconscious Foundations of Human Experience, P.81)

幼児の有する本能的動作は、9カ月にわたる母の胎内での経験から導かれたものであり、そこに象徴される経験を the infant's preconscious experience と Burrow は称し、例えば、『母が幼児の体をゆすって寝かしつけたりするのは、明らかに、幼児がまだ母の胎内にあった時に母の歩行とともに横にゆれていたあの受身的な前意識の経験を母が本能的に誘発していることを示すものである。』と述べている。

さらに、Burrow はかかる前提のもとに、私の研究テーマに示唆を与える次のような言葉をつけ加えている。

Material gathered from literature, dreams, myths, and folk customs affords overwhelming evidence that the significance of water symptomatically or psychologically is connected with the early physiological phase of the infant's preconscious experience as it rested in its amniotic medium within the uterine capsule. (ibid., P. 81)

③ 確に、正常な人間、あるいは精神病患者を問わず、人間というものは精神的慰安のために水に親しむものである。そして、水は人間本来の故郷である母の胎内に対する郷愁を喚起するものであり、そこへの帰還を誘発するものであるが、Burrow はこのような人間存在に固有な本能を the nest instinct と呼んでいる。

さて、このような現象を生みだす the preconscious mode は何か？

母の胎内に宿った胎児は、そのまわり中を羊水によって保護され、胎児はこの羊水^{へそ}と臍の緒という栄養補給パイプによって精神的にも肉体的にも母とつながっているのである。Burrow はこれについて次のように解説している。

There seems indicated the possibility of an organic connection between the influence of water on man's behavior and the water-medium occupied by the organism in the early months of its existence. I believe that the further refining of our observations will indicate a similar association between other instinctive behavioral attitudes and the nest instinct. (ibid., P. 86)

④ さて、<Ulysses>の第5挿話に目を転じてみよう。午前10時、ブルーム氏は友人ディグナムの葬儀に列席するまでの時間を利用してタラ街にあるトルコ風呂までぶらぶら歩いている。そこで水を愛するブルーム氏の白日夢が展開される。

Enjoy a bath now: clean trough of water, cool enamel, the gentle tepid stream. This is my body.

He foresaw his pale body reclined in it at full, naked, in a womb of warmth, oiled by scented melting soap, softly laved. He

saw his trunk and limbs rippled over and sustained, buoyed
lightly upward, lemonyellow: his navel, bud of flesh: and saw the
dark tangled curls of his bush floating, floating hair of the stream
around the limp father of thousands, a languid floating flower.
(Ulysses, P. 85)

『俺の体が温くもりのある子宮の中 (a womb of warmth) にやさしく抱か
れている。』という想像は、さきほど挙げた人間固有の the nest instinct を示
すものである。

ブルーム氏をこのような本能に駆立てる外的条件は何か？

⑤ 彼と妻モリとの間には息子ルーディの死後真の夫婦関係は閉ざされていた。しか
も妻は次々と恋人をつくってゆき、現在はボイランという25人目の恋人がいる。彼に
はルーディの他に4年早く生れたミリーという娘がいるが、実はこの娘が彼の実子で
はないという暗示がある。ブルーム氏はこのように家庭内では妻から阻隔された追放
人であり、しかも放浪の運命を背負わされたユダヤ人である。彼の現実逃避は、『俺
の体が温くみのある子宮の中にやさしく抱かれている。』という忘我的、あるいは脱
自的夢想行為となってあらわれている。それは、羊水の保護のもとに母の胎内にあっ
たあの9ヶ月間の人間だれもが味わう無意識の経験に引込まれたからにほかなるま
い。私がここで忘我的夢想行為という言葉を使ったのは、さきほどから引用している
Burrowの次のような理論を読み、それがブルーム氏の夢想行為にあてはまることを
感じとったからである。Burrowは、Homesickness という項で、主体と客体が渾
然一体となった境地——the Buddha-mind 即ち<菩提心>——について述べてい
る。

In Buddhism, the Buddha-mind is conceived as the void which
is “neither holy nor unholy, neither cause nor effect, neither good
nor evil, neither form nor characteristic, neither the root nor the
attachment of feelings, and neither the Buddha nor sentient beings.”
In order to attain the Buddha-mind, some zen masters urge
wu-nien, or absence of thought, since the mind is not to be in

any way attached to or influenced by objects. The state of nirvana has similar properties. ……………

Among the mystical school of Buddhists, the “realm of Matrix Repository” is one of the two great aspects of Buddha. The Matrix Repository has the significance of “to hold and to cover, …like keeping a child in the mother’s womb. This realm is Buddha’s Law- Body of Principle, the realm of absolute equality, of the dharmas, of form, of the horizontal cross-section of the universe, of Cause, of Great Compassion, and of sentient beings.” (Trigant Burrow: Preconscious Foundations of Human Experience, P.93)

人間というものは、母の胎内より生れおちると同時に、自己と客体という相離反する存在を意識するように運命づけられ、母の体液から離れて物質の海であるこの世界を放浪しつづけなければならない。ブルーム氏の夢想行為は、自己と客体が渾然一体となった完全なる平等の世界、仏教とくに密教でいう所の the Matrix Repository 即ち<胎蔵界>を想起せしめる世界へのしたたかなる郷愁を象徴しているのではなからうか。彼が絶えず夢想している東方の国々への憧れもこの東洋の神秘思想に対する親近感に基くものだと私は考える。

⑧ 第2に、このブルーム氏の夢想行為には、男性たる自己に生殖能力を持たせたいという憧れがみられる。既に述べた如く、一人息子ルーディの死後、彼は己れの後嗣の誕生を願っているが、妻との阻隔によって、それは夢想の世界でしか実現できない。

ここで私はフロイドの夢の象徴に関する言葉を引用してみる。

『精神分析家の経験は、顕夢の心象の中に潜在的な心象の象徴を看破し、かくされた他の心象を規則的に象徴する若干の心象があることを明らかにした。…………… 特殊な多くの象徴がある。例えば、分娩はいつも水と関連して表現される。水にはいるとか水から這い出るとかは子を産むとか自分が生れることを云おうとしているものである。この象徴は進化史の事実の上から二重の意味を有していることを忘れないで欲しい。即ちすべての陸棲の哺乳動物、さらに人類の祖先は水棲動物から進化したのである。これはあまり遠い事実だが——兎に角哺乳動物は残

らず、いや人類でもその生活の第一期を水中すなわち胎児期を母の子宮の羊水中で送った後分娩されて、始めて水の中から出てきたのであると云える。』(フロイド「精神分析入門」上巻、第10章夢の象徴、228頁)

このフロイドの理論によって明らかなように、この夢の象徴と象徴されるものとを結びつけるものは、Burrow が例証したあの the nest instinct, 羊水の中に安養浄土をもった母の胎内での無意識的経験にもとづく本能である。

⑦ 第3に、このブルーム氏の白日夢にみられる自己陶醉の模様は、美青年ナルシッソス (Narcissus>Nárkissos) とニンフ (Nymph>Númphē) 達の神話を想起させる。ナルシッソスに片恋をして欺された1人の処女が、ある日ひとつの祈願をかける。それは、ナルシッソスにもいつか物の恋しいということをお願いして、それと共にその愛情に報いられないようにさせてほしいというものである。復讐の女神はその祈祷を承諾する。ある日、狩りで疲れ、咽喉の渇きを覚えたナルシッソスが、銀のような水をたたえた清らかな泉のところにやってくる。その水を飲もうとしかがみこむと、池の水に自分の面影がうつる。彼はそれを誰かこの泉に住む美しい水の精だと思う。とうとう彼は我と我が身を恋するようになる。接吻しようと唇を寄せたり、水に腕をさし入れて愛する人を抱こうとするけれども、手をふれると面影は逃げて一瞬の後にはまた新たな嬌態をみせる。彼が逐げられぬおもいに嘆息して「ああ、ああ、」と叫ぶと、かって彼が欺したエコーというニンフが同じ言葉で答える。彼のおもいはついに胸の焔となって燃えあがり、ついにはやせおとろえて死んでしまう。その亡魂が三途の川を渡る時、水中の自分の影を捕えようとして舟から落ちてしまう。ニンフ達は彼の死体を焼きたいと思うが何処にも死体が見つからない。ただ彼が水に落ちたところに白い笹縁を取り廻らした内紫の花があったので、その花にナルシッソス水仙の名をつけてその人の記念としたのである。

「これが俺の体か。……彼の叢木の暗いもつれた縮れ毛が漂うのを、子孫を生みだす柔軟な父のまわりを漂う流れの毛を、ものうげな漂う花をみた。」

ブルーム氏が己れの体に陶醉している様は、ナルシッソスの神話に象徴される自己の女性化、自分で自分を愛する者を暗示しているようである。第4挿話においてブルーム氏は、ベッドの上にかかっている「ニンフの沐浴」という画像ゆあみを見て妻モリを「面紗をつけたニンフ」にみだてる。この妻モリの姿は、ナルシッソスが我と我が面影

を見つめながら思い焦がれる想像の水の精,あるいは自分の呼びかけに応ずるが実体のあらわれない水の精エコーを象徴しているのであろう。そしてブルーム氏の体のまわりにもものうげに漂う花は,ナルシッソスの化身である水仙の花を象徴しているのではあるまいか。<Ulysses>の中にあらわれる水の象徴は,生殖機能を有する母なる実体ばかりではなく,死への門出をも意味している。ものうげに漂う花は,生殖能力を有したいという夢の挫折——死を意味している。

⑧ この挿話につづく第6挿話で,ブルーム氏は “The Irishman’s house is his coffin.” (Ulysses, P.108) と独白して,夢想における生の世界から死の世界にはいる。また,友人ディグナムの葬式に出席しているところで,葬儀人夫が重そうにかついでいる棺を見て, “So much dead weight. Felt heavier myself stepping out of that bath.” (Ulysses, P.100) と連想しているが,これも生き抜くことへの願望から→死ぬことへの願望へと移ろいゆく無意識の状態を物語っている。ブルーム氏の心には火葬,水葬,土葬などさまざまな死体処置法が心に浮んでくる。

Earth, fire, water. Drowning they say is the pleasantest. See your whole life in a flash. But being brought back to life no.
(Ulysses, P.113)

溺死についての連想は後述のスティーヴンの連想につながっている。

⑨ 第17挿話では,それまで意識の流れとして浮遊していた水に関するブルームあるいはスティーヴンの記憶,回想,連想などが整理され,表示されている。

What in water did Bloom, waterlover, drawer of water, water-carrier returning to the range, admire?

Its universality: its democratic equality and constancy to its nature in seeking its own level:

the noxiousness of its effluvia in lacustrine marshes, pestilential fens, faded flowerwater, stagnant pools in the waning moon.

(Ulysses, PP. 655-656)

水を愛するブルーム氏が賛美する水の属性は,最初と最後の言葉において両極端を

示している。つまり、そのどちらをも迎え入れる寛大さを示している。水の普遍性、その民主的平等性は、第5挿話の入浴の夢に示されている生の領域、母の胎内に象徴される主体客体が渾然一体となった永遠に平等の世界であり、沼沢地、悪疫性湿地、萎んだ花の水、月のかける時期の澱んだ水溜りなどにおける瘴気の有毒性は、ブルーム氏のものうげに漂う花とその後につづく死の世界に象徴されている。

㊦ ガストン・バシュラールという人は文学の精神分析的研究の基礎を論じ、人間の精神に4つの要素—水・火・空気・土—がひきおこす無意識的反響を分析することを目的とする研究で、無意識と想像との知識にもとづいた文学批判観を発表しているということである。例えば、『水と夢』では、「水のように」夢みる無意識をとりあげ、

「水はナイアド（下級の水の精）、ニンフ（普通の水の精）を思い出させる。」
「水は、われわれの最後の旅と終局の溶解の思いを象徴する。」
「水に関係する無意識は、墓の彼岸、焼却場の彼岸で波にゆられて出発することを夢みる。」
「われわれは水の清らかさ、あるいは不潔さの魅力にも心の深層で暗々裡に共感する。」（ジャン＝C・フィルー「精神分析」125頁）

と述べている。

㊦ この理論からも、私はブルーム氏の **universal** な人間性、すべてを包容せんとする寛大な心情をくみとることができる。

さて、ブルーム氏にとっては魂の子たるステイーヴンの場合はどうであろうか？

I will go back to the great sweet mother,
Mother and lover of men, the sea.
I will go down to her, I and none other,
Close with her, kiss her and mix her with me;

Cling to her, strive with her, hold her fast.
O fair white mother, in days long past
Born without sister, born without brother,
Set free my soul as thy soul is free.

I shall sleep, and move with the moving ships,

Change as the winds change, veer in the tide;
My lips will feast on the foam of thy lips,
I shall rise with thy rising, with thee subside...
(Algernon Charles Swinburne: "The Triumph of Time")

<Ulysses> 第1挿話で、ダブリン湾を見おろす砲床にあがった友人マリガンは、Swinburne のこの詩を引用して、海に向い a great sweet mother, our mighty mother と呼びかける。この詩は、人間が母の胎内で羊水につかっていたあの9ヶ月間の無意識の体験からはぐくまれた the nest instinct を如実にあらわしている。

スティーヴンにとっては、海水とかそのほかすべての水状物質は臨終の枕辺で祈りを断った彼を責めにくる母の亡霊と結びつく。我々はブルームの場合と同様に海が対照的な2つの属性を有していることに注目しなければならない。

㊦ 第3挿話におけるサンディマウントの海辺を散歩するスティーヴンの内的独白——

His lips lipped and mouthed fleshless lips of air: mouth to her
womb. Oomb, allwombing tomb. (Ulysses, P. 48)

私の見る所によれば、allwombing tomb は一切衆生を胎蔵して安らかに永しえに眠らせる墓の意味で、死ぬ時、又は死にたい時には再び胎蔵界の安養浄土に往生して安らかに永しえに美しい夢をみながら眠らせて貰いたいと希求する無意識的願望から現象した idea であるものようである。西方浄土すなわち Hesperides すなわち常世の国、又は常夜の国は日の沈む西方海中にあるところの allwombing tomb であった筈。人々はいつかは復た目が覚めて常夜の国＝夜見の国＝陰の国＝夢の国から帰ること即ち夜見がえりすること＝蘇生してこの世に復えることを願望思考 wish-think していたことは明白である。

ここでスティーヴンの「溺死人」についての連想を引用する。

The man that was drowned nine days ago off Maiden's rock.
They are waiting for him now. The truth, spit it out. I would
want to. I would try. I am not a strong swimmer. Water cold
soft. When I put my face into it in the basin at Clongowes. Can't

see! Who's behind me? Out quickly, quickly! Do you see the tide flowing quickly in on all sides, sheeting the lows of sands quickly, shell-cocoacoloured? If I had land under my feet. I want his life still to be his, mine to be mine. A drowning man. His human eyes scream to me out of horror of his death. I... With him together down... I could not save her. Waters: bitter death: lost. (Ulysses, P. 46)

㊦ この連想は4つの部分にわけられる。第1は、9日前に溺れた男を救ってやりたいが命が惜しくて出来ないという独白、第2は溺れかかっているその男とともに水底に沈む己れの姿についての連想、第3に、母を救うことができなかったという自責の念、最後は、『海一苦しい死一今はなし。』である。

㊧ まず第2の部分に注目したい。客体であるはずの「水に溺れかかった男」はステイーヴン自身のイメージと彼のこわい父のイメージとの重複であるようである。主体と客体が連想が進むにつれて渾然一体となってしまう。それは、ギリシャ神話の工匠ダイダロスを芸術上の父と仰ぎその子イカルスとなって国籍とか言語とか宗教といった網の目を抜けてダブリンの空高く舞いあがったが再びダブリンで無為の生活を送っているうちに芸術への意欲がだらけてしまったステイーヴンが Love の中に最大の生き甲斐を発見した最初の段階への退行ぶりを示している。このすぐ後でステイーヴンは再び溺死体について連想するが、その中で“Full fathom five thy father lies.” (Ulysses, P. 50) と独白している。これはステイーヴンが芸術の父と仰いだダイダロスが死ぬる、すなわちステイーヴンの Art への意欲が失くなったことを意味している。〈A Portrait…〉(「若き日の芸術家の肖像」)の第4章で彼が見た美少女の水浴のシーンは自分の生き甲斐発見の最初の場である。その love scene を undermine する彼のダイダロスにかかわる Oedipus complex を沈めてしまった事を意味する。Art から → Religion 的信念=ダイダロス崇拜の放棄をとおして → Love の段階への逆行又は退行を意味している。

㊨ ここで再びフロイドの「精神分析入門」からの夢の象徴に関する記述を参照してみよう。フロイドによれば、水中から人を救うとか水中から人に救われるとかいう夢は省言すれば母と子供の関係を象徴化しているということであり、ランクが比較研究を

試みた英雄の誕生に関する伝説のうちには大概(最も古いものは紀元前約2,800年のアガアデのザルゴン王の誕生伝説)一度水に投げこんで置いて次いで水から拾い上げるのがその構造の骨子となっている。そしてランクは、この力ある人生の生き方を敢行する英雄の誕生神話は、夢におけると同様、死への誘惑のうち勝つ生への誘惑の力のはたらきを象徴するものであって、世界の到るところに存在している神話や伝説であるという事実に始めて気が付いたということである。神話において死のうとする子供を水中から救いあげて生き敢^かつ力をこれに与える人はその子供の実母であるとされており、さらに一口断の例が挙げられている。かしい猶太の子供が『一体モオゼのお母さんは誰だと思う。』とたずねられた。子供は即座に『王妃だ。』と答えた。『いやそうじゃない。王妃が水からモオゼを救いあげて自分の子供にしたのだ。』『王妃は口だけでそういつているのだ。』と子供は答えたということである。(フロイド「精神分析入門」上巻, 第10章夢の象徴, 229頁—230頁) この場合、王妃とモオゼの母親のイメージと自分のイメージとが三重に重複している事にその子供は無意識的に気付いたのである。

㊦ スティーヴンが水に溺れかかった男を救うこと、実は自分自身を救うために水にとびこむということは、上記の夢の象徴から考えて自分自身を母であると同時にその子であるとする自己同一性の重複であって、これはわれらの夢の中ではしばしば現われる現象で、少しも珍らしいことではない。拙論「魂の父・子を求めて」において示した如く、この夢想は断片的にスティーヴンの意識にのぼるサベリウスの理論によって、現在の自分から新しい自分を生みだしたいという、脱自的な自己超克的な自己創造的なエネルギーを有つもののシンボルである<キリスト>のように成りたいという根元的な願望と結びついている。そしてその願望は——その根元的な彼の選択は、Religion から → Art に向って転生せんとする彼の前に立ちふさがり大きな障害をとり除きたいという切迫した気持から生れたのである。その障害とは、幼少の時からカトリックへの帰依を迫り、芸術家に転生せんとする彼にとって大きな束縛となると同時に、一方では、幼少の時から彼の胎内復帰の願望の母胎となっている彼の母親の面影であった。彼がうち建てとした芸術は、あらゆる束縛から自由な新しい創造の力の母胎から生れるものであり——“In the virgin womb of the imagination the word was made flesh.” (A Portrait, P.217) と彼自らが叫んでいる如く、自己の imagination という処女母胎から生れる自己創造の芸術であったのである。

水の中に溺れ死ぬ自己の姿は、新生面を開発しようとする努力の挫折であり、次の部分『俺は母を救うことができなかった。』は、やはり親への定着を清算して自己を救い出すことが出来なかった事を云っているのである。ここにも母親のイメージと自己のイメージとの重複（かさなり）が有る。したがって最後の『海——苦しい死——今はなし。』は、二つの意味を持っている。（その一）は芸術によって自己の新生命を開拓しようとする努力の挫折を意味し、（その二）は、実母——死——母親定着の対象の喪失を意味するのであるから、彼にとっては二重のショックであったわけである。

㊦ 己れの新目標である革新的な芸術制作への努力の挫折の原因となった母に対する愛情の固着は、〈Ulysses〉全篇にわたってスティーヴンの心奥に暗い影をなげかけているが、特にスティーヴンの Oedipus complex とこれに随伴する母親コンプレックスが彼の憂愁の主たる原因であると観察している研究者は私ばかりではなく、いくらもいる様である。彼の Oedipus complex は確に〈Ulysses〉において一つの問題を提示しているが、その complex が万人共通の体験として幼少時代に顕著であることから考えて、〈Ulysses〉ばかりではなく、〈A Portrait……〉における幼児スティーヴンの経験の中にその端緒をさぐらなければならないと思う。〈A Portrait……〉の冒頭のシーンは、幼児スティーヴンの夢の顕在内容である。

When you wet the bed first it is warm then it gets cold. His
mother put on the oilsheet. That had the queer smell.

His mother had a nicer smell than his father. (A Portrait, P.7)

すでにスティーヴンの母親に対する愛情の定着はここに芽生えている。

ここで私はさきほど引用したフロイドの夢の象徴の記述の補足ともいえる次の言葉を挙げてみよう。

『子供は自分の父親を巨人と思ひやすい。象徴的体系としての父にはまだ多くのものがある。王様のほか、かしら、ライオン、ワシ、オウシのような強い動物がある。ワシがわれわれを食べようとする夢の場合、この夢はエディプス・コンプレックスのうちの《父親恐怖》の要素と関連している父親の報復を意味することは誤りのないことである。……この種の夢が常習的にみられる場合には、父の権

威に対する劣等感が表現されている。』

（ジャン=C・フィル—「精神分析」,79頁）

⑱ さて、再び〈A Portrait……〉の冒頭のシーンにもどってみよう。私はこのシーンの最後の部分に注目したい。ここでは、〈Ulysses〉の制作に至るまでにスティーヴンが辿る苦難の遍歴が見事に圧縮され象徴されてあると思う。

When they were grown up he was going to marry Eileen.
He hid under the table. His mother said:

- O, Stephen will apologize.

Dante said:

- O, if not, the eagles will come and pull out his eyes. -

Pull out his eyes,

Apologize,

Apologize,

Pull out his eyes.

Apologize,

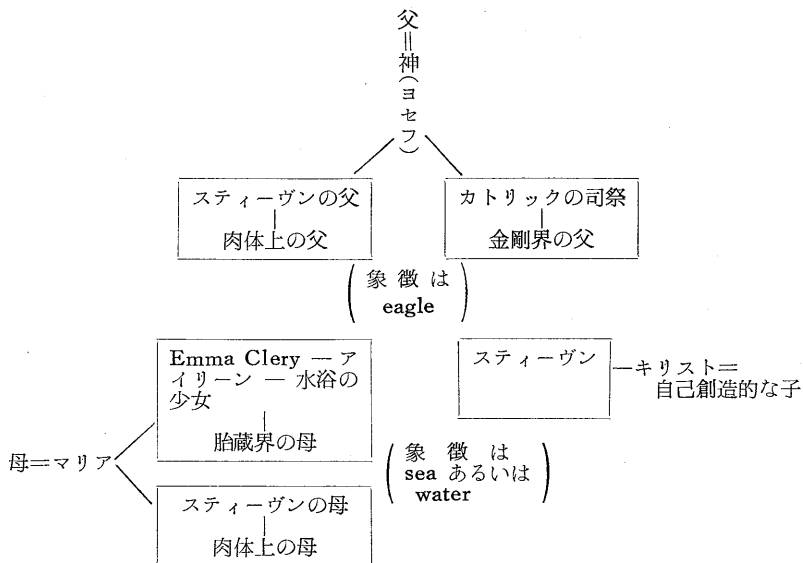
Pull out his eyes,

Pull out his eyes,

Apologize.

(A Portrait, P.8)

幼なじみアイリーンとの結婚についての希望、それにつづく『鷲が来てお前の目ん玉をくりぬくぞ。』とくりかえされる脅迫的な言葉は、〈A Portrait……〉から〈Ulysses〉にいたるまでつづく Oedipus complex にかかわるスティーヴンの受難を予言するものとして大きな意義を秘めているようである。スティーヴンの Oedipus complex について論をすすめる便宜上、私はここで彼の心奥に象徴的に現象する父と母とのイメージを図示してみたいと思う。



㊦ アイリッシュをはじめとして、スティーヴンに何らかのかかわりをもつ三人の少女は彼の夢の中ですべて聖母マリアのイメージをたたえており、これら異性との逢瀬の瞬間にスティーヴンの芸術への意欲は高揚されて一種の宗教的な *ecstasy* をおぼえる。彼にとってはこの瞬間が *sex-art-religion* の融合されて一体となる時である。(これについては、拙論 *A Peculiar Structure of an Autobiographical Novel* PP.68—69, 梅光女学院短期大学紀要 I, 文学論集(1)にて詳述。)

スティーヴンは、肉体上の父たるサイモン・ディーダラス、宗教上の父たるカトリックの司祭から離反するが、肉体上の母に対する情愛をどうしても断ちきることができない。(「父性」および「母性」に関するスティーヴンの観念や、母のイメージが聖母マリアのイメージを有していることについては、さきに発表した「*Ulysses* に関する一考察」PP.30—31において述べている。) 彼が究的に求めたものは唯一つ、永遠の美の女神、彼の芸術上のマスコット=守り神的な存在であった。自己の運命を変えてさえくれる彼の芸術上の守護神に会う決定的な瞬間 (<*A Portrait*……> の第4章、水浴の美少女との出会いの場) を彼は次のように夢みている。

The noise of children at play annoyed him and their silly voices made him feel, even more keenly than he had felt at Clongowes, that he was different from others. ……………

He would fade into something impalpable under her eyes and then in a moment he would be transfigured. Weakness and timidity and inexperience would fall from him in that magic moment.

(A Portrait, P.65)

『自分は他の者とはちがうのだ。』という観念と、『彼女（彼の芸術上のマスコット）と会った瞬間に自分の姿は消えて目には見えない何ものかになり、一瞬のうちに変質する。』という夢想は、さきの論文で述べた如く、＜Ulysses＞においては、三位一体論にかかわる連想において彼は自分自身のイメージと創造主（つくりぬし）たる神のイメージと自分で自己を創造するキリストのイメージとを重ねて超人間的な存在となってあらわれる。そのことはスティーヴンの連想の中にある『俺もキリストと同じように、創造されたので（単なる動物存在として）生れたのではない。』（“I was too, made not begotten.” Ulysses, P.39）という言葉を見ても明らかである。自分は単なる動物的存在ではない。創り主たる神の分身であるとする悟り＝＜金剛智＞から、莫大な創造的なエネルギー＝＜金剛力＞を有つに至った＜自覚存在＞である、金剛界の＜金剛童子＞であるという大きな自信を彼は有つようになったのである。作者ジェームス・ジョイスの文学が近代の実存主義文学の先き駆けであると云って高く評価される所以のものは実にここに存するのである。

☒ さきほど引用した＜A Portrait……＞の冒頭のシーン、最後の部分にもどってみよう。アイリーンとの結婚希望と恐しい鷺の出現は、単純な解釈では割りきれない。ここに現われる鷺は、母への愛情に苦しむ母親定着者（mother-complexee）スティーヴンに報復せんとする父サイモン・ディーダラスのイメージであり、それはまた、アイリーンに代表される胎藏界の母のイメージを求め、また、これと合一しようとするスティーヴンに対して、かつて彼自身が持った修道上の理念＝＜金剛智＞を代表するカトリックの司祭であった人からの脅迫観念であり、ひいてはマリアのイメージと重複した水浴の美少女を見て profane な喜びの声をあげながら而もキリスト的創造の芸術家たらんと志向するスティーヴンに対する絶対者なる父の神の烈しい怒りを象徴

しているのではなからうか。『目ん玉をくりぬく』という箇所は、識らずして父を殺し、母親イオカスタと結婚したテバイの英雄オイディプスが二重の罪を知って狂人になり、自分の目をえぐりぬいてテバイの地からさまよい出たというあのギリシャの伝説を下地にして透かし書きをしているようである。ジョイス研究者の中には、この場面が Prometheus に関するギリシャ伝説を象徴していると述べている人がいる。

(Hugh Kenner: *Two Decades*, ed. Gives, P. 137 および Marvin Magalaner: *Joyce, the Man, the Work, the Reputation*, P.112) しかし私は、〈Ulysses〉に至るまでスティヴンの脳裡にたえず浮遊していた父性と母性に関するコンプレックスから、Oedipus 物語の場合をこの冒頭の夢にあてはめざるをえないのである。さりながら Oedipus 神話も Prometheus 神話もインドの金剛童子神話もひとしく人間が自覚存在であるという悟り＝金剛智、仏智、wisdom を人々に授けるための神話であるとする事には私も異存はない。

㊦ これまで、ブルームおよびスティヴンの白日夢や連想の中にあられる水あるいは海を媒介にした母親のイメージについて述べてきたが、〈Ulysses〉第17挿話では水の属性に対するスティヴンの観念がさきほど挙げたブルームの場合と対照されて挙げられているのでここに引用してみたい。

What reason did Stephen give for declining Bloom's offer?

That he was hydrophobe, hating partial contact by immersion or total by submersion in cold water (his last bath having taken place in the month of October of the preceding year), disliking the aqueous substances of glass and crystal, distrusting aquacities of thought and language. (*Ulysses*, P.657)

特にこの中の『ガラスや水晶のごとき水状物質を好まず。』という箇所は、第15挿話における母の亡霊の場面を想起させる。娼家街にはいつているスティヴンの前に破れた花嫁のヴェールをかぶった母の亡霊があらわれる。

THE MOTHER

(In the agony of her deathrattle.) Have mercy on Stephen,

Lord, for my sake! Inexpressible was my anguish when expiring
with love, grief and agony on Mount Calvary.

STEPHEN

Nothing!

(He lifts his ashplant high with both hands and smashes the
chandelier. Time's livid final flame leaps and, in the following
darkness, ruin of all space, shattered glass and toppling masonry.)
(Ulysses, PP. 567-568)

破れた花嫁のヴェイル、とねりこのステッキで打ち破られるシャンデリアが、母に
対する性的衝動の遂行であるとする解説をどこかで読んだ記憶があるが、私はこのス
ティーヴンの行動が氷によって連想される母への愛情 (Oedipus complex) の念を
払拭しようとしての自己投企ではなかろうかと思う。

㊦ <Ulysses> において主人公の眼前に出現する水あるいは海にかかわる夢、連想
などをとおして、我々はスティーヴン、ブルームの両者の心奥に疼くそれぞれ独自の葛
藤を垣間見ることができると同時に、一方では、両者に共通した憧憬、たとえば「自
らが母になりたい」という the nest instinct にもとづく夢想を感知することができ
る。したがって、この両者は分離された存在ではなく、実にジョイスという一個人が
持つ二様の精神構造の化態にほかならないと申してもよいし、同時に、人間本能にも
とづく万人共通な、根元的な苦悩、欲望、憧憬といった感情や思想を示しているとい
ってもよいであろう。

エリオットは<Ulysses> についての批評の中で「神話的方法」という言葉を用い
ているが、ジョイスはホメロスの「オデュッセイア」をはじめとする伝統的な神話や
伝説の情景を下地に置くことによって彼自身の関心事を見事に客観化している。神話
や伝説が歴史の流れに反抗する人間存在の根元的な選択に深く根ざしており、そこに
現象するあらゆる感情、思想が万人の無意識の領域に定着しているかぎり、スティーヴ
ンやブルームの心情も当然 universal な人間存在の矛盾構造すなわち自己の現在の
又は過去の在り方を守ろうとする<死の本能>と自己の理想=対自に向って自己の現
状=即自を超えんとする冒険的な<生の本能>との ambivalence = 両面価値対立
の矛盾にかかわる心情であるべき筈だと私は思う。〔死の本能、生の本能という言葉

はもともとフロイドの用語であり、実存主義の用語としてはそれぞれ自分の生き方に対する消極的態度の根元的選択、自分の生き方に対する積極的な態度の根元的選択というべきであろう。]

㊦ <Ulysses> 一篇には、物語的方法による plot なるものは存在しない。何故なら、ジョイスの目標は universal な人間存在の内面的な conflicts を彼のいう epiphany = <現像方法> 即ち今日の実存分析学的方法を用いて現像することであったからである。いかなるつまらないものでもその対象たりうるとジョイスはいう。ブルームやステイーヴンの脳裏に浮ぶとりとめのない意識の流れの底から人間存在の内面的葛藤の諸相が——神話や伝説に秘められた universal な人間性が、写真のフィルムに現像されるようにわれらの心の眼に現われてくるのである。 —終—

参 考 テ キ ス ト

1. Ulysses, The Modern Library, New York
2. A Portrait of the Artist as a Young Man, Penguin Books
3. Trigrant Burrow: Preconscious Foundations of Human Experience, Basic Books, Inc., New York
4. フロイド「精神分析入門」上巻および下巻, 安田徳太郎訳, アルス (ARS) 発行
5. ジャン=C・フィルー「精神分析」, 新福尚武訳, 白水社発行
6. バルフィンチ作「ギリシャ・ローマ神話」(伝説の時代), 野上弥生子訳, 岩波書店発行
7. 「実存思想の系譜」ジェームス・コリンズ著, 谷口・津田共訳, 誠信書房発行
8. 「フランス実存主義」松浪他二名訳, 篇, 河出書房新社発行

附記：筆者はこの論稿を草するに当って多くの示唆を本学の冨田教授から与えられた事を附記して謝意を表する。